コンテンポラリーダンス作品とその分析における脱中心化をめぐる議論の検討

中山広理・三輪佳音
（お茶の水女子大学大学院）
福本まあや（お茶の水女子大学）

1. 研究背景・目的

本研究の問題意識には、ダンス作品分析において間テキスト性、ハイパーテキスト性、脱中心化といった概念が、新たな解釈を生み出す上でどのように有意義かを検討することにある。Janet Adshead-Lansdale は編著『Decentring Dancing Texts: The Challenge of Interpreting Dances』（2008）において、これらの概念を踏まえて行われたコンテンポラリーダンス作品の複数の分析事例を示している。本研究の目的は、コンテンポラリーダンス作品とその分析法における脱中心／脱中心化をめぐる議論を検討することである。研究方法として、『Decentring Dancing Texts』より Sanders（4 章）、D'Amelio（6 章）、Rottenberg（9 章）の論文を対象にダンス作品分析における脱中心化という概念の実際を抽出整理した。

2. 結果と考察

2. 1. 作品分析法の議論の背景

Lansdale（2008）は、間テキスト性を用いた舞踊分析法を探求する上で、Landow（1997）が指摘した、ハイパーテキストは本質的には間テキスト的システムであり、オープン性を持った「豊かな検証手段」になりうるという主張に基づいて、分析プロセスにおける資料間のつながりを可視化する必要があると説明している（p.1）。意図的に間テキスト的アプローチを行う際に重要となるのは、研究を支える適切な理論と分析対象を選択することであり、分析においてどのように分析者自身の語り（narrative）が作用しているかに着目する必要があるという（p.2）。

ここで、脱中心化という概念を参照することによって、ポスト構造主義的な枠組みでダンス作品を捉えることが可能となり、各事例の分析の形式がその対象に特有の形で適用されることで、ダンスの内部構造（internal workings）に関心を向けることができる。また、間テキスト性とハイパーテキスト性を分析プロセスに適用するということは、要素同士の関係性に重点を置くことであり、観客の参与（engagement）の重要性が増すことにつながると指摘している。

2. 2. 作品分析の実際

Sanders は、Akram Khan の作品『ma』（2004）を事例に、作品評に頻出する「融合（fusion）」という概念の限界を指摘している。Khan の身体表現は、南アジアの伝統舞踊カタックと西洋のコンテンポラリーダンスの混合だけではなく、異なる文化的・歴史的背景を持つ身体システムが交差・重層することで生まれるハイブリディティと生産的曖昧性を体現していると述べる。批評家の評価が分かれるのは、作品が固定的なジャンルや様式に還元できない多義性を持つためだという。Sanders は、ダンス作品を分析・解釈する上でこのような曖昧さを否定するのではなく創造的な力として評価することの重要性を主張する。本章において脱中心化はハイブリッドな作品を分析・解釈するうえでの理論的視座を意味している。

D'Amelio は、Jérôme Bel の作品『The Show Must Go On』（2001）と Loïc Touzé の作品『Love』（2003）を取り上げ、ノン・ダンスにおける脱中心化の実際が、作者の芸術的志向、作品創作の意図、観客の反応などの複数の次元で起こっていることを明らかにしている。また、フランスの言語、制度、文化的背景がどのように作品に作用したのかをイギリス人の筆者の立場から考察している。Bel と Touzé の両者に共通するのは、形式と内容の不一致であり、それが観客の期待や既成の解釈の枠組みを揺るがすということを、彼は「トロイの木馬」に例えて分析している。

Rottenberg は、振付家 Lea Anderson が Egon Shiele のスケッチブックから着想を得た作品『Draw on the Sketch Books of Egon Shiele』（1998）において、脱構築とパスティーシュという手法で過去を借用することは、現代における「批判ツールとしての適用」であると指摘する。Shiele のスケッチを舞台作品化することで立ち現れる抑圧の構造という社会問題を観客に問い直していると解釈している。本章で浮かび上がる脱中心化の概念は、Anderson の手法と並列という作品構成に見ることができる。

3. まとめ

3 つの事例から、作品分析において脱中心化という概念は、作品テキストの構造、作品解釈の視点などの複数の次元において適用されていることが本稿の作業から見えてきた。一つの意味中心や権威ある視点に依拠するのではなく、多様な文脈、視点が共存することで、作品はより開かれた解釈空間になる。振付家らもまたダンス作品が持つ間テキスト性やハイパーテキスト性を創作プロセスにおいて意識しつつ、観客の能動的な参加を促していると考察される。

参考文献

Landow, G. (1992/1997) The Convergence of Contemporary Critical Theory and Technology, Bltimore, MD: Johns Hopkins University Press.